

日本赤十字九州国際看護大学/Japanese Red

Cross Kyushu International College of

Nursing

「この土の器をも」における成人期の心理・社会的  
発達

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2016-02-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 本田, 多美枝 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://jrckicn.repo.nii.ac.jp/records/490">https://jrckicn.repo.nii.ac.jp/records/490</a>

## 第七章

「この土の器をも」における成人期の心理・社会的発達

## 一、はじめに

この章は三浦綾子の自伝小説「この土の器をも 道ありき第二部 結婚編」<sup>①</sup>を、エリクソンの人格発達モデルを手がかりとして考察しようとするものである。ここでは、小説のテーマとなっている結婚生活の中で、光世と夫婦としての「親密性」をどのように獲得していったのか、また雑貨屋の開店、そして小説「氷点」の入選といった、新たなものを世に生み出す「生殖性」という発達課題をどういった経緯で達成していったのかについて論じ、成人期にあった綾子が結婚生活を通して人格発達へと向かう過程について考察する。

考察の方法は、主にE・H・エリクソン/J・M・エリクソン著（一九九七年）、村瀬孝雄・近藤邦夫訳『ライフサイクル、その完結へ増補版』<sup>②</sup>に基づき、人格発達図式を参考にしつつ解釈する。その詳細は分析の中で後述するが、エリクソンのモデルを分析の手がかりとした理由について簡単に述べておく。本書「序文」にも述べられているようにエリクソンは、人間の人格発達を社会との相互的な関わり合いの中で発達の形成されていく過程とし、人が生まれてから死ぬまでの生涯全体がテーマであると考えた。それをライフサイクル<sup>③</sup>という観点から捉え、人生の中には人格特性の発現していく節のようなものが八つあることを示している。この節が心理・社会

的危機と言われるものであり、その時期特有の課題を解決しつつ、危機を克服していくことで、人格は生涯を通して発達していくという「漸成的発達」を説いている（「漸成原理」epigenetic principle）。

こうしたエリクソンの基本的前提を踏まえ、自伝小説「この土の器をも」を読み解けば、成人期にある綾子の人格発達についての過程を描き出すことが可能となり、三浦綾子その人の理解と、小説に込められている読者へのメッセージの意味をよりいっそう深めることができるものと考ええる。

まず「この土の器をも」が書かれた時代、作品の位置づけを確認する。

## 二、「この土の器をも」が書かれた背景

### (1) 作品の位置づけ

水谷昭夫氏による巻末の解説によれば、「この土の器をも」は、昭和四十四年九月号から翌四十五年十二月号まで、雑誌「主婦の友」に「わが結婚の記」として連載されたものであり、連載終了と同時に、昭和四十五年十二月五日主婦の友社より単行本にまとめられ、出版されたものであるとされる。前作「道ありき 青春編」に続く自伝小説の第二作で、第三作「光あるうちに 道

ありき第三部 信仰入門編」と合わせて三部作となっている。

第一作「道ありき」は、昭和二十年敗戦の混乱期に小学校教師を辞めるところから書き始められ、昭和三十四年の三浦光世氏との結婚の日で結ばれている。綾子二十三歳から三十七歳までの十四年間に綴られている青春の記「道ありき」は、「自己発見の記録」であったと、第二作「この土の器をも」の冒頭で述べられている。白井氏の「青春とは自己鍛錬による、自己発見の時だ」という言葉を引用し、敗戦後の虚無的生活、十三年間の闘病生活、洗礼、そして恋人前川正の死といった過酷な時期を生き抜き、三浦光世との結婚に至るまでを、綾子は「青春」と呼び、それは「自己発見」のときであったと記している。

「この土の器をも」は、こうした「青春」を生き抜いた綾子の、光世との新しい生活の告白であり、「夫婦の、愛と信仰の告白」をテーマとするものである。小説は、昭和三十四年五月（綾子三十七歳、光世三十五歳）の結婚第一日目の朝から書き始められ、昭和三十九年七月（綾子四十二歳）、朝日新聞の懸賞小説に応募した「氷点」が一位入選したことで結ばれている。結婚十年目を迎え、四十八歳になった綾子が、新婚当時の三十七歳から四十二歳までの五年間を記していることになる。生涯を病と共に生きた綾子にとって、もっとも平穏なときであったと思え、また作家として始動する礎はこの時期に形成されたものであり、重要な時間でもあったと言えらる。

## (2) 綾子の半生

ここで綾子の半生について確認しておく。「漸成的発達」を考えれば、これまでの綾子のたどった人生、人格発達の経緯を踏まえることは必須であると考えるからである。しかし、その詳細を述べることは紙幅の関係で困難であるため、三浦綾子自作年譜、「道ありき」、久保田暁二『三浦綾子の世界』などを参考にして、その概略を述べるにとどめる。

綾子は大正十一年（一九二二）、北海道旭川市に堀田鉄治、キサの次女（第五子）として生まれる。死者行方不明者約十四万人を出した関東大震災の起こる前の年である。昭和十四年（十七歳）、旭川市立高等女学校を卒業し、小学校の教師となるが、敗戦による挫折から二十四歳（昭和二十一年）で教師を辞職した。虚無感に打ちひしがれている綾子を、さらに肺結核が襲いかかり、脊椎カリエスも併発する。当時、肺結核は「死の病」として恐れられていた。川上武編『戦後日本病人史』によれば、「戦前から戦後しばらくの間、肺結核は死病であり、多くの人々の命を奪い、一命をとりとめた人にも後遺症を残した。（中略）一九五一（昭和二六）年に『脳血管疾患』が死亡原因の一位となるまで『全結核』は死因順位のトップの座を占めてきた」とされている。綾子の十三年間にもおよぶ闘病生活の始まりであった。

綾子は二重婚約、自殺未遂と自暴自棄になってしまいが、そうした綾子の前に現われたのが前川正である。前川は深い愛情と人間性を通じて綾子をキリスト教に導くが、昭和二十九年、三十五歳の若さで肺結核によって他界する。綾子三十二歳のときであった。心のよりどころをなくし

た綾子の悲しみは深く、一年間ほとんど人に会わず、ギブスベッドで過ごしている。こうした苦境の中で三浦光世（当時三十一歳）と出会う。光世は、前川を愛し続ける綾子の全てを受け入れ、いつ治るともわからない綾子を五年間も待ち続けて、ついに結婚したのである。前川、その亡き後は光世に支えられ、綾子は自分自身を、そして自らの生きる道を発見していった。

エリクソンの人格発達モデルに照らして考えれば、よりどころを失い「同一性の拡散」によって退行している綾子を、前川、続いて光世が癒し、彼らに支えられて、再び世の中への信頼感、人々への信頼感を獲得することができたと考えられ、そのことを通して、青年期の発達課題である「同一性」の獲得に向かったと言える。

こうした苦難を乗り越えてきた綾子の背景を踏まえつつさらに考察を進める。

### (3) 綾子の生きてきた時代

綾子の生きてきた時代について確認しておくことも不可欠であろう。綾子が十九歳のとき、日本は戦争を始め、軍国主義に傾いていく。二十三歳で敗戦、その後、日本には民主化の波が押し寄せ、高度経済成長期に突入する。綾子は、価値観の変容を迫られる、まさに激動の時代を生きたことになる。こうした時代に生きてきた綾子の結婚生活、そして作家デビューに至るまでを考察することにあたって、当時の日本の結婚観や女性に対する役割意識はどうであっただろうか。

結婚の形態は時代と共に変化する。結婚観は時代の社会体制、男女の社会的地位関係などの影

響を受け、それが結果として結婚観を形成する。戦後の日本においては、新たに制定された憲法の精神に則って民法が改正され、当事者の合意による婚姻制度と夫婦家族制が基本になった。戦前の「家」重視、嫁入婚などの考え方が法的に変化し、それが戦前からある結婚観を変えていく下支えになったと言える。その結果、結婚に対する考え方も多様化し、それまでにないライフスタイルが数多く現われ、次第に女性の社会的地位や役割意識も変化していった。しかしその一方で、女性の基本的な役割は家庭において家事、育児に従事し、外で働く夫に憩いの場を提供することであるという伝統的な考え方も根深く残っていた。

こうした時代の中で「結婚生活とは何か、家庭を築くとはどういうことか、夫婦のあり方はどうあらねばならぬかを自己に問い続けながら」書き綴られたものが「この土の器をも」であり、それゆえ、この作品を人格発達の視点で考察する。

### 三、「この土の器をも」のあらすじ

考察の手順として、まずあらすじについて確認する。人格発達の図式を適用するに当たって、図式に収斂する危険性を避け、つとめて作品の内容に即して考察するために、資料としての意味も含めて、やや丁寧に述べることにする。

「この土の器をも」は△三十一▽節で構成されている（以下、節については△▽で示している）。その概要は、以下のようにあらすじ1〜20で示すことができる。

1・結婚生活のはじまり（昭和三十四年五月、綾子三十七歳、光世三十五歳）

ひと間の物置を改装した小さな家から結婚生活が始まる。中嶋牧師の「真の夫婦になるためには、一生の努力が必要」という言葉が胸に浮かぶが、何をどう努力してよいのかわからない△▽。料理、洗濯もできない役立たずの人間がどんな家庭を築き上げていくのか△▽。

2・夫婦の進むべき方向づけとなった二つの手紙、苦悩を抱える人たちの訪問

教え子の桜井、友人の国村から結婚を反対する手紙が届く。多くの人を受け入れ、愛する家庭にしなければならぬと光世と話し合う△▽。綾子の家には、苦悩を抱えた多くの人たち（七十過ぎの老人△△、国村則雄△△、のちに自殺した女医岡本三千子△△など）が訪れる。

3・前川家への訪問（昭和三十四年六月）と片道だけの新婚旅行（昭和三十四年九月）

光世と前川家を訪問。前川の両親は二人の訪問を喜び、綾子自身も心おだやかに過ごす△▽。出張中の光世と上川で待ち合わせ、層雲峡へ向かう。十三年も療養生活を送ってきた三十七歳の綾子と三十五歳の光世の新婚旅行は、他者にはうかがい知ることのできない感慨であった△▽。

4・許しの問題を突きつけられた二つの出来事（クリーニング事件、元同僚のK子）

光世の背広がクリーニング店で盗難。弁償してもらおうと意気込む綾子に光世は黙って許すように言う。綾子は許すという言葉を改めて思い、すべてを許し合うのが結婚生活でなければならぬと思う（八）。子供が醬油差しを割った時、K子は「失敗したときは、誰だつて、あ、しまったなと思ってるのよ。しまった、悪いことをしたと思ってる時に叱つたら、もう、そのすまないという思いは消し飛んじやうのよ」。この寛容な態度、許す態度に舌を巻く（九）。

5・静養中の光世との生活（昭和三十四年十月―昭和三十五年六月、綾子三十七歳）

疲労の重なった光世は、微熱、盗汗、息苦しきで自宅静養。綾子は光世としみじみと話し合う時間を与えられたような安らぎを感じる（十）。生涯病弱といって光世に改名をすすめるMに、光世は「あなたがたはキリストのために、ただ彼を信じることだけではなく、彼のために苦しむことも賜っている」と聖書の言葉を伝える（十一）。結婚後初めて迎えた正月、綾子は去年の正月の喜びを思い返し、光世に深く感謝する（十六）。光世は八ヶ月の療養生活にピリオド、昭和三十五年六月六日より出勤する（十八）。

6・家計簿の中の「万分の一費」

交際費がかさむことを嘆く綾子に「今まで皆さんにお世話になったその万分の一でもお返しすると思ってみたらどうだ」と光世。万分の一費と改める。感謝というものは自分自

身を大きく動かすものだ」と改めて知る。互いの恩人を大事にすることは夫婦のあり方として大切（十二）。

7・旭川市民の注視をあびていた実子殺し裁判の傍聴（昭和三十四年十一月）

愛する者（高校教師であつた夫）をポックリ病<sup>(8)</sup>で失い、吾を忘れて子供二人を殺し、後追い心中をしようとした女性に、人ごとではない思いをもって裁判を傍聴。人間がいかにか日常生活の中で、自分の立場でしかものを考えないものかと痛切に知らされた（十四）。

8・日記に記された光世とのいざこざ（？）

いらいらして光世のあごをつついたことを指摘され、みじめになった。また、つまらぬことで怒り、光世と十分ほど口をきかなかつたが、両手をつけて謝った。いろいろな思いを積み重ねて、夫婦はそれぞれ大人になっていく（十五）。

9・光世の郷里（北見滝ノ上という農村）へ訪問（昭和三十五年十月、綾子三十八歳）

食事衛生に神経質な綾子を光世は郷里に連れて行ったことがなかった。光世の父の墓があり、光世が十四歳まで暮らしたその地を綾子は見たかった。しかし石ころだらけの土地を見て、大正初期、福島から夢を託して北海道開拓にきた三浦の父、家族のことを思うと大きな憤りを感じた。それでも光世の育った山中に来て綾子は喜びを感じ、はえのついたご飯も平気で食べ、光世に「綾子は愛のある奴だ」と誉められた（二十）。

10・土地探しと新居の建築計画（昭和三十五年九月、綾子三十八歳）

借家の立ち退きを迫られ、別を借りようとしたが、クリスチャンであることから断られる。綾子は光世が働く営林局から五十万円借り(当時光世の月給は二万円程度)、家を建てようと思いつく。土地探しの条件はキリスト教案内の掲示板を立てるにふさわしい場所。二度も案内されたことから、田んぼの中の淋しい場所を借地契約する。新居の建築は、敬虔なクリスチャンである鈴木棟梁に決める(十九)。

11・六条教会牧師館生活で光世を襲った腹痛(昭和三十六年三月七月、綾子三十九歳)

中嶋牧師アメリカ留学のため、後任牧師が来るまでを牧師館で暮らす(二十)。六月、光世を腹痛が襲うが、数日、診断がつかず、光世は衰弱する。内科医の柴田、外科医の石田によってやっと盲腸炎と診断、手術となる。数日後、点滴ビンの汚れ(髪の毛がビンの内側に貼りついていた)を看護婦に申し出るが、とりあってもらえず、悪感が光世をおそす。もし光世が死んだら……初診の医師と看護婦を一生恨み続けずにはおかない。その時、「吾らに罪を犯す者を、吾らが許すごとく、吾らの罪を許し給え」が浮かぶ。毎日祈る「主の祈り」の一節で、ふだんは何の抵抗もなくとなえていたこの言葉がいきなり綾子の前に立ちはだかった。今、光世の苦しみを前に、許しという問題がやっと自分自身の問題として迫ってきた(二十一)。

12・新居での生活、懸案の雑貨店開店(昭和三十六年七月八月、綾子三十九歳)

七月五日、光世の退院と同時に新築の家に移る(二十二)。綾子は結婚して二年ほど、ひる

鍵をかけて本を読んでいたが、閉鎖的な生活からは何も生まれない。反対する光世を後目に、雑貨店開店に向けて動きだす。八月一日、ついに念願の雑貨店が開店する（二二三）。

13・主婦の友社に手記「太陽は再び没せず」が入選（昭和三十七年新年号に掲載、綾子四十歳）

林田律子というペンネームで執筆した手記が入選。反響は大きく、大衆の読む雑誌に発表されることの大切さ、クリスチャンは外に向かって語りかけねばならないと切実に思う（二二四）。

14・詐欺窃盗の果てに自殺した教え子M、心を閉ざした少年との出会い

綾子は罪を犯したMからの詫び状に対し、慰めの言葉と共に厳しい言葉を書き添えたが、Mが自殺。以後、雑貨店に来る少年たちに心をつかうようになる。ただ一人、物言わぬ少年があり、その閉ざされた心を開くのは、雑貨店の一主婦である綾子には不可能なことと思ふ（二二六）。

15・朝日新聞一千万円懸賞小説の執筆を開始（昭和三十八年一月、綾子四十一歳）

昭和三十八年元旦、母が秀夫（弟）に言われたと懸賞小説を募集する朝日新聞を手渡す（二二七）。縁者が殺された事件を思い出し、その夜、小説の略筋を作る。光世は執筆を許可、「ただし神に祈って、御旨（神の意志）に叶うかどうか、よく考えてみなさい」。小説の舞台は二人にとって忘れられない見本林<sup>9</sup>に決め、雑貨店を続けながら小説を書く日々（二

十八。執筆中、社会はなぜ幸福になりにくいのか、原因は何かと考え、罪の問題につき当たる。これをクリスチャンとして訴えねばならない。この使命感がなければ小説を書き通すことはできなかつた(三十一)。

16・近所に同じ雑貨店が開店、売り上げを伸ばすために酒を売るといふ綾子に光世反対

「親孝行の金は神がくださる(中略)どうしても酒を売りたいといふなら離婚しよう」といふ光世の言葉にハツとする(二十九)。

17・性生活に不満あり離婚するといふ知人T子の来訪

T子に自分たち夫婦のことを隠さずに話す。T子は夫婦とは何か、結婚とは何かを知らない。人格と人格の結びつきがなくて、どんな会話が生まれるだろう、愛が生まれるだろう。体さえ愛撫されれば満足するような愛を、夫婦愛だとは思いたくなかつた(三十)。

18・子供クリスマスと小説の締め切り(昭和三十八年十二月三十一日)

締め切り十日という頃に風邪で倒れる。小説は未完成でそのコピーもとれていない。綾子は恒例のクリスマス会を正月に延期したいと申し出るが、「神の喜び給うことをして、落ちるような小説なら、書かなくてもよい」「入選するにきまっている原稿のコピーなど、どうして必要なんだ」。光世の言葉に従い、一〇〇名近い子供達とクリスマスをする。最後の四日間、必死になって書き続け、十二月三十一日午前二時、ついに小説「氷点」が完成する(三十一)。

19・肺炎の光世、階段を踏み外した綾子の臥床生活（昭和三十九年一―六月）

一月、光世は急性肺炎と診断。臨終間近と感じた綾子は夜も眠れず、昼に額をすりつけて祈る。光世の母に、あなたたちにはまだまだ使命があるから、光世は大丈夫と言われる。一ヶ月後には愁眉を開かせる状態となるが、綾子は看病疲れで階段を三段踏み外す。臥床生活が何日か続くが、光世の母の言葉、「綾子さんは確かに女の仕事は上手とは言えないけれど、でもね、神さまはその人その人に、ちがった使命を与えているのですからね。与えられた才能を使命と思って進んだらいいと思いますよ」に打たれる（三十二）。

20・応募七三二編の中から、小説「氷点」一位入選（昭和三十九年七月十日、綾子四十二歳）

第一次選考（六月十九日）、第二次選考（六月三十日）に選ばれる。七月六日、一位内定の連絡。光世の帰宅後に感謝の祈りを捧げる。「綾子、神をおそれなければならぬよ。人間は有名になったり、少しでも金が入るようになって、そうでなかった時より、愚かになりやすいものだ（中略）これからの歩み方は大切だよ」「綾子、神は、わたしたちが偉いから使ってくださいるのではないのだよ。聖書にあるとおり、吾々は土から作られた、土の器にすぎない。この土の器をも、神が用いようとし給う時は、必ず用いてくださる。自分が土の器であることを、今後決して忘れないように」。七月十日、新聞には入選の記事がデカデカと出ていた（三十二）。

#### 四、成人期の人格発達

「結婚編」と副題のある「この土の器をも」には、綾子の五年間の結婚生活が描かれており、日常の中で起きる出来事の一つ一つに正面から向き合って生きる綾子の姿を垣間見ることができ、その日常性の中で、綾子は愛するということ、夫婦としてあるということ、そして神を信じ、畏れるということがいかなることであるのかを身をもって知っていく。また、当時センサーションを巻き起こした小説「氷点」が、世に送り出されるまでの過程がリアルに描かれている。

こうした作品のあらすじを、本書の二頁および一三頁のエリクソンの人格発達図式に照らして捉え直してみると、そこには二つのテーマが浮かび上がってくる。その一つは、あらすじ119に見られるような、結婚生活を送る中で夫婦としてのあり方を模索し、光世と夫婦になっていく綾子の姿であり、それは前成人期の発達課題である「親密」を獲得していく過程でもある。

もう一つは、あらすじ10120に見られるような、雑貨店の開店、小説「氷点」の入選といった、新たなものを世に生み出していく綾子の姿であり、成人期の発達課題「生殖性」を獲得していく過程でもあると捉えられる。

エリクソンによれば、成人期には二つの段階、前成人期(early adulthood)と成人期があり、それらは青年期と老年期の間に位置づけられる。各段階に当てはまる年齢の幅については「あら

ゆる必要条件を考慮に入れた上で、一つの発達的特性が相対的な優位性を獲得し、意義深い臨界期に到達しうる最も早い時期と、それが、発達全体のために、この臨界的優位性を次の特徴に譲り渡さねばならぬ最も遅い時期とによって定義するのが妥当であろう」と述べられ、見いだされる発達の特徴によって各段階には年齢の幅があることが示唆されている。

結婚当初の三十七歳の綾子を前成人期に、雑貨店の開店などに着手し始めた三十九歳頃からを成人期に位置づけて考察することの理由は、発達の特徴を考慮した結果であり、それはまたエリクソンの論理からも妥当であると言えよう。

以下、「この土の器をも」を前成人期と成人期の発達課題と照らし合わせて考察を深めていくことによって、成人期にあつた綾子の人格発達について論じたい。

#### (1) 前成人期「親密対孤立」

エリクソンは前成人期の発達課題として「親密 (intimacy)」と「孤立 (isolation)」との葛藤の過程における「愛」の獲得をあげている。青年期の同一性感覚の探究を潜り抜けてきた若き成人たちは、今度は自ら進んで、彼らの同一性を相互の親密性の中で融合させ、仕事や性愛や友情の中で相補的な関係を確実に持ちうる個人たちと、その同一性を共有するようになる。

こうした「親密」こそが、この段階に求められる基本的な力である「愛」を獲得する基盤である。一方、「親密」に対する心理・社会的な対立命題は「孤立」、つまり、誰からも離れ、「誰か

らも目を向けられぬ」状態にあることへの恐怖である。この「孤立」の孕む最大の危険は、同一性の葛藤が退行と敵意をまじえて再燃することにあるとエリクソンは述べている。この前成人期の発達課題を踏まえて、作品を捉え直してみよう。

綾子の結婚生活はたったひと間の小さな家から始まる。旭川六条教会の牧師である中嶋正昭氏の、「結婚したからといって、翌日からすぐに夫婦になったといえるものではない。わたしたちが真の夫婦になるためには、一生の努力が必要である」という言葉が結婚第一日目の朝、胸に浮かぶが、何をどう努力してよいのか見当がつかない<sup>△△</sup>。十三年間療養し、料理、洗濯も満足にしたことのない役立たずの人間が、どんな家庭を築き上げていくのかと綾子は案じた<sup>△△</sup>。

当時、家事をすることは、家庭における女性のもっとも基本的な役割とされていた。しかし光世は病弱の綾子を思い、家事もよく手伝ってくれた。綾子はその優しさを受け止めつつも、家事もまともにできない自分が、どんな家庭を築いていくのかと暗中模索であったにちがいない。

しかし、結婚前には感じたこともない感情が、綾子に光世の妻であることを確認させる。結婚祝いのお礼に、光世と亡き前川正の実家を訪ねたとき、今はもう前川正の恋人ではなく、光世の妻であることを実感する<sup>△△</sup>。友人の国村則雄が光世の留守中に訪ねてきたときには、異性の友人を部屋にあげてよいものかとためらいを抱いた<sup>△△</sup>。また十三年間、寝ている生活が日常だったにもかかわらず、光世の留守中、安静のため寝ていることに気が咎めることもあった<sup>△△</sup>。

こうした一つ一つの感情が、「妻」というものの感情なのだ綾子はしみじみと実感し、光世

の妻である自分自身を受け入れていく。

その一方で、綾子は、日常のさまざまな出来事を夫婦のあり方を指し示す道標として受け止める。それは、光世の人間性と信仰心に支えられた言動が綾子を導くものでもあった。たとえば、結婚を反対する手紙が届いたとき、光世は綾子に「結婚は必ずしもすべての人の喜びではない。それ故にこそ、只二人だけ仲が良ければよいという閉鎖的な家庭であってはならない」と言った。綾子は自分たちの家庭を、多くの人を受け入れ、愛する家庭にしなければならぬと改めて光世と話し合ったのである△▽。

また、光世の背広がクリーニング店で盗まれたときには、弁償してもらおうと意気込む綾子に「馬鹿だねえ、綾子。そんなに文句を言うもんじゃない。黙って許してやることだよ」、「聖書には何と書いてある。許してやれと書いてあるだろう。（中略）許すということは、相手が過失を犯した時でなければ、できないことなんだよ（中略）」と光世は言った。そのとき、綾子は許すという言葉をあためて思い、何とありがたい男性を夫に与えてくださったことだろうと神に感謝した。そして、結婚というものも二人の人間がお互い全面的に相手を受け入れなければ成り立たないものではないか。すべてを許し合うのが、結婚生活でなければならぬとつくづく思うのである△△。

こうしたことから、綾子は光世の人格にふれ、夫婦としてのあり方を問いつつ、その歩みを続けていることがわかる。

さらに、綾子と光世の精神のつながりの深さを、以下の記述からもうかがい知ることができ  
る。「わたしは大体において、人の話は聞くが、自分の心の中を何もかも打ちあけるとい  
う性格ではない。ところが三浦と結婚してからは（中略）他の人には決して見せない心の奥  
まで語ってしまう」。それゆえに、結婚前にはつけていた日記を書くこともまねになつたとい  
う（十五）。また、過労が重なって光世が自宅療養した際にも、綾子は「しみじみと話し合  
う時間を与えられたような、そんな安らぎさえ感じていた」。結婚半年も経たないうちに光世  
が欠勤することになつても、じめじめと暗い空気ではなく、二人は短歌の批評をかわし、静  
かな時間を過ごしている（十一）。

病む吾の手を握りつつ眠る顔も優しと思う

夫の顔を両手に抱きてくちづけぬ共に短き命と思へば 綾子

朝より疲れ訴えるし妻がしぐるるひるを物炒めをり

涙出づるまでに素直に聞きてゐつ妻が語る前川正との過去 光世

こうしたことから、綾子は光世に心をゆるし、光世もまた同様であつたことがうかがえる。  
しかし、それでも思いたつてつけた日記には、いらいらして光世のあごをつつき、みじめになつ  
たことが記されている（十五）。

当時、綾子は光世を心から愛していると自負しており、その自分が愚かしいみにくいことをし

たので、かなりショックだったと書いている。また、あるときにはつまらぬこと（家の設計図）で光世に怒り、十分ほど口をきかなかったことがあった。しかし綾子はすぐに両手をつけて謝り、「悪人とはわたしのことである」と墨で半紙に書いた。

病人の自分を待ち続け、結婚してくれた大恩人に怒るとは何という悪い女だ、それは日夜自分に言い聞かせなければならぬ言葉であり、半紙を天井に貼ることにした（十五）。「いろいろな思いを積み重ねて、夫婦はそれぞれ大人になっていくものである」と綾子が述べている言葉には、こうした日常の中で生じるさまざまな心理的葛藤を乗り越え、その積み重ねの結果として、お互いが成長し、夫婦として育っていくのだという意味が込められているのではなからうか。

そうした夫婦の愛情と信頼は、初めて迎えた正月の姿からもうかがい知ることができる。綾子は光世に教わりながら、三浦家方式の雑煮を一生懸命に作った。またその雑煮を食べる光世を眺め、幸せだったと言う。「ありがとう光世さん」「何が?」「何もかも」（十六）。

いつ治るともわからない綾子を待ち、励まし続けてくれた光世に、綾子は心から感謝し、それと同時にこの上ない幸せを実感した。

このような綾子の結婚生活を概観すると、光世の誠実で信仰深い人格とのふれあい、妻であることを実感しつつあった綾子を大いに刺激し、夫婦とは何か、どうあらねばならないのかを考えさせていることがわかる。

綾子はこうした日常の出来事一つ一つを意味深く受け止めることによって、夫である光世との

関係を親密なものとして築き上げ、さらなる信頼を光世に寄せていったものと考えられる。

「夫婦の関係は、人格の関係だ」、「人格と人格の結びつきがなくて、そこに一体どんな会話が生まれるだろう。愛が生まれるだろう」と語る綾子、人には見せない心の奥まで光世と語り合う綾子、こうした綾子の生きる姿は、自己の同一性を光世のそれと融合させていつている姿であると捉えられる。それはすなわち、前成人期の発達課題である「親密」を獲得していく姿であると解することができるだろう。

当時の綾子には、「親密」の対立命題である「孤立」の影はほとんど見られない。光世との人格の結びつき、相互に受容する関係が築けていけたから、綾子は孤立することなく結婚生活を過ごせたのだと言えるのではなからうか。つまり、光世と築いた家庭というのは、多くの友人を受け入れる家庭でもあった。綾子は、光世との親密性を深めていったというばかりでなく、家族や友人、教会の人々との交流を大切にし、その関係性の中で、この時期の発達課題である「親密」を獲得していったものと言えよう。

さらにその段階が、その後の段階にとって発達の不可欠なものであるという「漸成的発達」を考へるならば、それ以前の、青年期の課題である「同一性」の感覚を十分に獲得できていたからこそ、同一性喪失の恐れをもつことなく、信じるに足る光世とその同一性を融合させていくことができたのだと解釈することができるだろう。

すでに述べたように、あの過酷な「青春」の中で「自己」を発見してきた綾子であっただけ

に、その自己を見失うことなく、前成人期の発達課題である「親密」を獲得することができ、そのことによって、この時期の基本的な力である「愛」を得ることができたのだと言えよう。

## (2) 成人期「生殖性対停滞」

続く成人期には、どういった発達課題が準備されているのだろうか。この時期には、「生殖性 (generativity) 対停滞 (stagnation)」という重大な対立命題が与えられているとエリクソンは指摘する。ここで言う生殖性は「子孫を生み出すこと (procreativity)」、生産性 (productivity)、創造性 (creativity) を包含するものであり、(自分自身の) 更なる同一性の開発に関わる一種の自己——生殖 (self-generation) を含めて、新しい存在や新しい観念を生み出すことを表わしている<sup>(11)</sup>。

つまり、成熟した人間は、必要とされることを自覚する。それゆえに、「生殖性」は次の世代を確立させ、導くことへの関心であり、世代継承的サイクルを意味する。またこの時期に獲得すべき基本的な力は、「これまで大切にしてきた人や物や観念の面倒をみることへのより広範な関与」を意味する「世話 (care)」である。その一方で、生殖的活動の活性を失った人たちの心全体を覆うものは、停滞感である。

前成人期の課題である「親密」を獲得してきた綾子であったが、次なるこの課題「生殖性」についてはどうであったろうか。

まず「子孫を生み出すこと」として、子どもを生み育てることについて見てみると、三浦夫婦、とくに綾子は体が弱く、子どもを作らなかつた。夫である光世は次のような歌を詠んでいる。「この弱き妻が子を背負うと思うだに憐れにて子を願う心になれず」。綾子は「三浦にしても、本心は子供を欲しかつたにちがいない、しかし、子供をもうけることだけが結婚の目的だとは、わたしたちは考えていなかった。二人がお互いの人格を尊重し合いながら、子供のない夫婦はそれなりに、この世に果たすべき使命があると思っていた」と記している。

第二次世界大戦後のベビーブーム（昭和二十二―二十四年頃）はピークを越していたとは言え、結婚当時の昭和三十四年頃の日本社会において、妻の社会的役割として子どもを生み育てることを第一とする風潮が根強かつたことは否めない。そのような中で、光世は綾子の体のことを思い、子どもをもうけることを望まなかつた。綾子も子どもを生めないことを悲観するのではなく、子どものいない夫婦としてこの世に果たすべき役割があるのだと認識する。しかしながら、その役割とはいったい何であつたか。

綾子は結婚してまもなく、念願であつた掲示板を家の前に立て、教会案内と聖書の言葉を人々に伝えた（五）。新居を建てるための土地探しの第一の条件も、掲示板を立てるにふさわしい場所であつた（十九）。

さらに、その新居で雑貨店を始めた第一の目的は、一人でも多くの人に接して、自分がいかに絶望から希望に立ち直つたか、これを伝えたかつた。すなわち伝道が目的であつた。「結婚して

二年ほどわたしは、ひる、鍵をかけて本を読んでいた。そんな閉鎖的な生活からは、何も生まれるわけではない。二人は結婚する時、少しでも人様の役に立ちたいと願っていたはずだった。(中略) 店を開くことによって、少なくとも近所の人と馴染みにはなれる。そして、その中の一人にでも、キリスト教の伝道をすることができたら、というのがわたしの願いだっただけ。光世の反対をおしきり、借金をしてまでも新居を建て、雑貨店を開きたいと願った綾子は、見事に「無から有を生み出す業」をやったのけるのだ。そして雑貨店を始めてから、綾子の食欲は増し、次第に体力もついていった(二一三)。

さらに、綾子は林田律子というペンネームで手記「太陽は再び没せず」を執筆する。神がいかによき助け手を送ってくれたか、信仰を与えてくれたか、光世といかにして結婚するに至ったかを書いたその手記が、主婦の友に掲載され、大きな反響をよんだ(二一四)。

このことよって綾子は、大衆の読む雑誌に発表されることの大切さを痛感し、またクリスマスチャンは外に向かって語りかけねばならないと切実に思うのである。また、教え子Mに自殺された綾子は、雑貨店にやってくる少年たちに特に気をつかうようになる(二一六)。

綾子にとって彼らは客というより、教え子にも似た愛すべき存在だった。しかし、その中にただ一人、実に暗い、ものひとつ言わない少年がいた。綾子はその少年に歩み寄ろうと試みるが、拒否的な態度の少年の、深く閉ざされた心を開くことはついにできなかった。「この少年の、閉ざされた心をひらくものは誰か。それは雑貨店の一主婦のわたしでは不可能なことなのだ。わた

しは彼を見る度にそう思い、憂鬱だった。のちに小説を書くようになったとき、人生を誤った多くの青少年たちから感動の手紙をもらった。「あの暗い少年は果たしてわたしの小説を読んでくれているだろうか。読んでいてくれたらと、わたしは切実に思う」。

こうしたことから考えると、子どものいない綾子にとって、この世に果たすべき役割とは、人々の幸せを阻む社会に向かって、また揺れ動く若者たちに向かって、歩むべき道を指し示す「もの」を生み出し、そのことを通して彼らを導くことではなかったか。その使命を綾子は自らに見出したのだと言えるだろう。

そして、歩むべき道を指し示す「もの」とは、まさに「小説」であった。幼い頃から、祖母のおとぎ話を聞いて育った綾子は、幼少期には「本きちがい」の異名をとったほどである。十一歳ではじめての小説「ほととぎす泣く頃」を書き、読むこと、書くことは元来好きだったようである。こうした綾子が、中嶋牧師に勧められて、「声」（六条教会で出していた月報）に原稿を書き、そのことが、手記「太陽は再び没せず」を出すきっかけともなっている（二二）。

また、朝日新聞の懸賞小説募集の記事を母に見せられたとき、書けるわけがないと言いながらも、一晩で長編小説の略筋を作っている。綾子は、療養中に遠縁の者が殺された事件を思い出し、「もし、自分の肉親が殺されたら?」、そう思ったとたん、これだとアイデアが浮かんだという（二八）。三浦光世「綾子へ」の中で、光世は「私に縁のないことと笑って帰ってきた綾子が、一晩で小説の荒筋が出来たと言ひ、翌日には私に『書いてもいい?』と問うたことは忘れ得

ない」と述べている。

綾子は小説の書き方も知らなかったが、手紙か日記でも書くようにすぐに書き始めた。光世の就床後が小説を書く時間で、午前二時頃まで書き続けた。病弱であった綾子が昼間、雑貨店をしながら長編小説を書くということは、よほどの努力であったことだろう。「自分がしたいことをするというのは、決して辛くもなく、悲壮感もなかった（中略）。それでもわたしは時折、（いつまでつづくだろうか）と、思うことがあった」。

こうした綾子の執筆活動を陰で支えたのは、言うまでもなく夫の光世である。それと同時に、「訴えねばならぬ」という使命感だった。「もし好きなだけなら、わたしはこの辺で、ペンを投げ出してしまったであろう。だが、わたしは、書きながら、人間の社会はなぜこんなにも幸福になりにくいのか、一体その原因は何かと考える時、やはり教会で教えられている罪の問題に、つき当たらずにはいられなかった。この、罪の問題を、クリスチャンとして訴えねばならぬと思った」。こうして、昭和二十八年十二月三十一日午前二時、ついに小説「氷点」を完成させるのである。

その年が明け、光世は肺炎で床に伏してしまう。綾子もまた、看病疲れから階段を三段踏み外し、しばらく臥床生活となる。その綾子に光世の母は、「綾子さんは確かに女の仕事は上手とは言えないけれど、でもね、神さまはその人その人に、ちがった使命を与えているのですからね。与えられた才能を使命と思って進んだらいいと思いますよ」と言葉をかけてくれた（三十二）。

懸賞小説に応募したことを誰にも言っていない状況の中での、しかも当時の、嫁は家事、育児に励むべしという風潮の中での、こうした言葉、それを言っている姑の存在は、「小説」を書くことを通して、その使命を果たしているようにする綾子を後押ししてくれたにちがいない。

昭和三十九年七月十日、ついに小説「氷点」は、朝日新聞一千万円懸賞小説に一位入選となった(三十二)。

以上のような綾子の生き様を見ると、「生殖性」のもっとも直接的な形態である、子を生み育て、親になるということは綾子の人生において一度もなかったことがわかる。しかし、エリクソンが「生殖性」という言葉によって、親であること (parenthood) 以上の意味を付与したように、綾子はこの時期、「創造性」のある、社会に開かれた活動に携わることによって、「生殖性」という発達課題の達成に向けて進んでいることがわかる。

新居に雑貨店を開店し、それまでの閉鎖的だった生活を変えようと試みることに、信仰と愛の告白である手記の雑誌掲載、そして小説「氷点」の執筆と一位入選。こうした活動の一つ一つが、新しいものを世に生み出す営みそのものであったと言えるだろう。また、こうした活動に綾子を突き動かしたものは、幸福になりにくい社会に身を置く人々に、その歩むべき道を指し示したいという使命感であり、それは次の世代を導くことへの関心であったと言えるだろう。

すなわち、綾子は成人期の対立命題である「生殖性対停滞」を、「生殖性」に傾けることによって、その時期の基本的な力である「世話 (care)」を獲得し、その歩みを、個を越えた世代継

承的サイクルへとシフトさせていくことができたのだと言えるだろう。

もちろん、この時期の綾子にとって、光世の存在が大きかったことは言うまでもない。綾子は結婚生活を通して光世との「親密」な関係を築き、その関係性に支えられたことによって、次なる課題である「生殖性」に関心を向け、課題達成に向けて奔走することができたものと解釈できるだろう。

## 五、信仰と人格発達

さて、これまで述べてきたことから、「この土の器をも」に流れる、結婚生活の中で人格発達を遂げていくテーマを解することができた。それが小説としての感動を生んでいると言えるが、この作品にはさらに深く流れるテーマがある。先にも述べたように、それは信仰である。それもまた、人格発達との関連で解することができる。

前述のように、あの過酷な「青春」の中で綾子を虚無感から救ったのは信仰であった。そして敬虔なクリスチャンである光世との結婚生活、家庭の中には常に信仰があった。それは綾子の生き方を決定づけ、クリスチャンとしての使命が小説を生み出す原動力にもなったという意味においては、信仰が綾子の人格発達に深く関与していることは明らかである。こうした一連の流れを

顧みると、その背後には人智を越えた大いなるものの存在を予感させ、それはあたかも綾子の人格発達のために準備されていたもののようにも感じられる。

ともあれ、この時期の綾子は、一時的に臥床生活を送ることはあっても三十二、肺結核の再発もなく過ごしている。死の病とされた結核も、抗結核剤の輸入や国産化によって、昭和三十年をヤマに下火にむかい、誠実な光世との結婚生活は、綾子にとって至福のときであったことだろう。それにもかかわらず、綾子は日常を安易に惰性で生きるのではなく、いろいろな出来事の中に信仰を求め、それとまっとうに向き合って生きている。それは「家庭もまた教会でなければなりません」という信仰の先輩、菅原氏の言葉に沿おうとするものであり、より所とする信仰、その聖書に基づいた言葉を問い続け、その連続が綾子の生き方そのものであったということであろう。

その中でも、綾子の信仰のあり方を根底から揺さぶる出来事が起こった。それは光世が盲腸炎で重症になったときのことである三十二。腹痛と吐き気で苦しむ光世に、初診の医師は三日ほど診断をつけることができなかった。内科医の柴田が伴ってきた外科医の石田によって、やっと盲腸炎と診断され、手術となったのである。さらに術後の衰弱が著しいときに、看護婦はビンの内側に髪の毛が貼りついた不潔な点滴をした。その直後に、激しい悪寒が光世をおそい、綾子は「……耳採血しなかった初診の医師も、不潔な点滴をした看護婦も、わたしは共に許せないと思つた。もしこのまま三浦が死んだら、わたしは一生この二人を恨みつけずにはおかないと思つた」。

当時、医療は第一次医療技術革新期<sup>13</sup>にあり、手術の安全性は高まりつつあったが、盲腸炎（虫垂炎）の診断に関しては、今日のような精度の高い血液検査やエコー、CTスキャンはなく、ほとんどが症状と理学所見に頼っていた。そのため、的確な診断は、経験豊富な外科医の診察によるところが大きかったようである。

点滴静注については、昭和二十年代後半から行われていたが、当時、輸液ラインや点滴製品が完全に清潔とは言えず、点滴によって悪寒戦慄を覚える病人が多かった。また輸液に用いられる器具のほとんど——イルリガートル、ガラス活栓つきガラス drip chamber、タコ管（穿刺針連結部）——がガラスで、その間を黒い不透明のゴム管が付き、それらを何回も煮沸消毒して用いていた。一九六〇年代以降の石油化学の進歩と普及によって、輸液器具はプラスチックのディスプレイザブルになったが、それ以前の輸液器具には、安全性、衛生面で問題があった。

当時のこうした医療状況を踏まえつつも、光世を愛している綾子であっただけに、そのときの怒りは押さえようもない、内から込み上げてくるものであったことだろう。しかし、そのときふと、聖書の言葉が浮かんだと綾子は言う。

「吾らに罪を犯す者を、吾らが許すごとく、吾らの罪をも許し給え」という祈りの言葉だった。毎日、わたしたちが祈る「主の祈り」の一節であった。ふだんは何の抵抗もなくとなえていたこの言葉が、いきなりわたしの前に立ちはだかつたような気がした。わたしはその時、自分がいかにいい加減な信者であるかを思い知らされた。自分に許さなければ

ならぬ相手のいない時は、何の問題も感じない言葉だった。(中略)今、三浦の苦しみを前にして、そしてあるいは死ぬかもしれないという恐怖の中で、許しという問題がやっと自分自身の問題として迫って来たのだ<sup>(14)</sup>。

この出来事は、後に小説「氷点」を書くときの重大なヒントになったとされるが、いつか牧師に言われた、「聖書の言葉は、自分の問題をひっさげて読まねばならぬ」ということを意味ぶかく受け止める契機となり、綾子に大きな教訓を与えた。それはまた、その後の信仰のあり方、生き方を決定づける出来事であったという意味においても、綾子の人格の発達に寄与したとも言えるのではなからうか。

ところで、この作品のタイトル「この土の器をも」は、小説「氷点」で文壇デビューすることになった綾子に光世が言った言葉に由来する。「綾子、神はわたしたちが偉いから使ってくださいるのではないのだよ。聖書<sup>(15)</sup>にあるとおり、吾々は土から作られた、土の器にすぎない。この土の器をも、神が用いようとし給う時は、必ず用いてくださる。自分が土の器であることを、今後決して忘れないように」。一位入選の喜びにわく綾子を前に、光世の何とも謙遜な言葉である。

しかし、絶望の果てにあの虚無的生活を経験してきた綾子であっただけに、自分を取るに足らない弱き小さな人間であると認め、全面的に自らを神に委ねるのである。自分の弱さ、醜さを神の光の前にさらけ出すという姿勢は、作品の中でも一貫しており、タイトルの由来もここにあると思われる。

綾子はこの言葉の中に、傲慢に生きるのではなく、神を畏れ、祈り、謙遜に生きること、そして、命ある限り与えられた使命を全うできるよう、苦しみを喜びとして歩いていくことの大切さ、そのことによって人生が展開していくことを告げて作品は幕を閉じるのである。それはまた、今後の綾子の人格としての発達、新たな歩みの始まりを予感させるものでもある。

## 六、おわりに

この章では、自伝小説「この土の器をも」にみる三浦綾子を、エリクソンの人格発達モデルを手がかりとして考察した。「夫婦の、愛と信仰の告白」をテーマとするこの作品は、成人期にあった綾子の五年間におよぶ結婚生活が描かれており、夫・光世と夫婦になっていく姿や、その愛に支えられて小説「氷点」を世に生み出していく姿は、エリクソンのモデルで言うところの「親密」、「生殖性」という、成人期の発達課題を獲得していく過程であると解することができる。過酷な「青春」を乗り切ってきた綾子であっただけに、この新たな歩みは、読み手に小説としての感動を与えているのだと言える。また、この作品にはさらに深く流れるテーマがあった。それは信仰であり、綾子の結婚生活や生き方に信仰が深く組み込まれ、人格を形成し、その発達に大いに寄与していることをも示した。

今回は、自伝小説「この土の器をも」に限定して、成人期にあった綾子について考察してきたが、三浦綾子の人格発達をさらに理解するためには、「生涯を通じた」発達という視点で、その他の自伝小説と照らし合わせた分析が必要である。また世に生み出された綾子の文学作品などの分析を通して、小説に込められたメッセージの意味を読み解き、三浦綾子という一人の人間を深く理解するための一助としていくことも必要である。

— 註 —

- (1) 使用テキストは新潮社(新潮文庫)、三浦綾子『この土の器をも 道ありき第二部 結婚編』(昭和五六年)を用いる。
- (2) E・H・エリクソン、J・M・エリクソン、村瀬孝雄・近藤邦夫訳『ライフサイクル、その完結(増補版)』みすず書房、二〇〇一年。
- (3) ライフサイクル(Life cycle: 人生周期)という用語はもとも生物学の用語で、個体としての生物が、受精から死に至る規則正しい生活をめぐって一生を終える様相をさしている。エリクソンは、人間も同様に、個体としてその人格は、新生児から死に至る生涯をライフサイクルの規則に従って経過していくと考えた。
- (4) 結核性脊椎炎のこと。主に肺結核より血行性に脊椎骨結核を生じ、病変はほとんどの場合椎体より始

まる。臨床的には罹患部棘突起の叩打痛、脊柱の硬直、姿勢異常などを示す。かつての治療は、ギブスベッド臥床による安静と抗結核薬の使用であったが、近年では病巣搔爬、椎体固定術などの手術が行われる（内菌耕一・小坂樹穂監修『看護学大辞典 第五版』メヂカルフレンド社、二〇〇二年）。

(5) 川上武編『戦後日本病人史』農山漁村文化協会、二〇〇二年、六三頁。

(6) ギブスベッドとは、患者の身体にピッタリ合うように、ギブス包帯でかたどって乾燥させ、内側に青梅綿を平にのばし、ストッキングネットをかぶせて作ったベッドのこと。安静を保つために用い、一般には背部側と胸腹部側の二面を作る。患者の身体をきちんと合わせ、ベッドの両側を砂のうで固定し、腰や肩が圧迫されないように保持する（内菌耕一・小坂樹穂監修、前掲書）。寝返りをうつことさえ許されない仰臥したままの生活が強いられるため、七年間もギブスベッドで過ごした綾子の苦痛がどれほどのものであったかが推察できる。

(7) 三浦光世『綾子へ』（角川書店、二〇〇二年）によれば、当時の光世の微熱について、「営林署勤務時代の激務の疲れが、四年も経って出てきたらしくもあった。事実、同様の激務を体験して、ふだん頑健であった人が早死された例もある。これは一人二人ではなかった。今でいう過労死である」（一四二頁）と述べられている。また、結核の再発も懸念して病院でいろいろと調べてもらったが、入院する必要はないということであった。光世は十七歳のとき、腎臓結核で片腎摘出している。

(8) ポックリ病とは青壮年突然死症候群のことである。青壮年の屈強な男性が、夜半や明け方、寢床で唸り声をあげて死亡することがある。原因は刺激伝達系異常、精神的ストレス、遺伝性等が疑われたが

不詳のままである（内菌耕一・小坂樹穂監修、前掲書）。

(9) 旭川宮林署所管、外国樹種見本林。一八九八年（明治三十一年）以来、約五十種の外国針葉樹が植樹されてきた。

(10) E・H・エリクソン、J・M・エリクソン、村瀬孝雄・近藤邦夫訳、前掲書、八八頁。

(11) 上掲書、八八頁。

(12) 三浦光世『綾子へ』前掲、六六頁。

(13) 川上武・小坂富美子『戦後医療史序説』（勁草書房、一九九二年）によれば、「この時期の技術の特徴を一言でいえば、第一次医療技術革新期である。抗生剤、抗結核剤、その他ステロイドが販売された時期であり、外科手術では輸血、全身麻酔が普及し、安全性が高まる。戦前は手術すること自体が生死にかかわったが、この時期になると国民が安心して手術を受けられるようになる」（一三頁）と記されている。

(14) 三浦綾子『この土の器をも』前掲、一五五頁。

(15) 「わたしたちは、この宝を土の器の中に持っている。その測りしれない力は神のものであって、わたしたちから出たものでないことが、あらわれるためである」（新約聖書、コリント人への第二の手紙第四章七節）。

本 田 多 美 枝